

## 娘は両親のどこと似よるのか

——親子の似より感をベースにした分析——

秋 山 幹 男

What is inherited from Parents to a Daughter

——An Analysis based on *Similarity* between Female Students and their Parents——

Mikio Akiyama

愚直の一念で牛歩のごとき歩みを持続させてきたのだが、そういう凡夫にも何とか現象学的にはあるが、それなりに独自の科学的な道を切り開くことはできるのだと感じ取れるようになってきた。微々たる事実の積み上げではあったとしても、この事は一学徒として嬉しい限りである。投げ出さないで試行錯誤しながらも取り組み続けた小さな努力の結晶なのである。

親子の似より感研究は、心内化と継承化という二つのプロセスに分かれてきた。本当にコツコツとデータを分析し学会で発表した。四苦八苦しながら分析法の模索に明け暮れた(秋山1974, 1980, 1981, 秋山・有馬1985, 秋山1988)。しかし、論文に仕上げることを繰り返していくなかで、少しずつ視野が広くなり、何をを目指しているのかが見えるようになり、研究の意味するものも浮上してきた。何と、その間に30数年が経過してしまった。まとめた順にみていくと、一つの流れは心内化研究(秋山1992, 1993, 1994, 1997, 1998, 2001, 2002, 2004, 2006)、もう一つは継承化研究(秋山1999, 2000, 2003)となってきた。本当に気の長い、息の詰まるような思いを何度も何度もしながら、どうにか形有るものになってきたという実感は持てるようになった。これまで17編の論文にまとめ上げてきたが、その内の9編は主に心内化中心の研究で、残りの3編が継承化に焦点づけた論文となっている。この論文数からみても心内化の方がはるかに多い。データを一度に並行させながら、同時に分析・考察し論文化したかったのであるが、残念ながら能力・余力が無く、時間は容赦なく過ぎ去ってしまった。やっとなこと親子の似より感における継承化研究に集中する時が訪れてきた。

秋山(1999)では、娘(学生)とその両親が捉えた相互の性格認知を比較検討できた。三者のデータが揃ったのは83組だったので、200名以上の資料を駆使することのできた心内化研究のように、大・中・小群に分けての分析はできない。そこで、大・小二群の少し荒っぽい比較をすることになっていった。しかしながら、七区分表示法における区分③にはいった項目数で群分けをした場合、中群の上位約25%は大群の特徴を、中群の下位約25%は小群のそれに近い結果を出し続けてきている(心内化研究で)。三者込みの群分けとなると、8通りの組み合わせができる。この時は、娘・母親・父親＝大大大群(22名:26.5%)、小小小群(24名:28.9%)だけで大きく全体の半数以上を占めた。この二群の間には、はっきりとした違いが現れた。

評定者である娘では三者の認知において、F3誠実性とF4明朗性で共通な有意差が得られている。評定者である父親は、F2自己顕示性で三者共に差をだした。これに対し、評定者の母親には共通した差は得られていない。「娘」についてはF1内向性、F2, F3で二群間に差、「自分」ではF1とF4で、「夫」ではわずかにF2で差を見せている。つまりはバラバラ認知である。

秋山（2000）においては、対象者である若い母親のデータが291名入手できたので、養育態度と親子（幼児）の性格認知について、母親とその実父母との似より感（区分③）を大・中・小の三群に分けて分析を試みた。人格（性格）認知では、母親のMF4明朗性・MF2自己顕示性と母親からみたわが子のCF1陽気・CF2わがままを組み合わせで4×4のマトリックスで、三群の出方（人数）をみてみた。また、養育態度（保護、拒否、支配）についてもこの16マトリックスで比較検討した結果、16の領域での大群と小群の人数には顕著な差が得られたのである（すべての領域においてではなく、偏りながらではあるが）。この研究は、母親とその実父母との似より感をベースにしたものであったが、50歳頃の両親の受け止め方の違いが子育てにも大きな影響を与えることが示唆されたのである。

秋山（2003）では、両親が自分の実父母とどの様に似よりを感じているのか。また、家庭で家族の関わりを維持しながら（子どもを育てていくうちに）、夫婦と子ども（ここでは一人の大学生の娘）の三者間相互の似より感はどうような結びつきとなってきたのかを明らかにした。やっとなこと結果をさらに発展させて量的な結果をだすところまでたどり着いたのである。このマトリックス分析法のルーツは、20歳代という若かりし頃シロネズミを被験体にした行動療法の基礎研究にある（回避学習の消去期分析：1968, 1969, 1973, 1974）。自分なりに工夫したこの時の分析法が、2000年の論文のまとめ方にも同じように活用され、娘（学生）とその両親の人格（性格）認知の類似や差異を、量的（人数差）に取り出すことができた。親子の似より感研究における継承化のテーマを、親子の組み合わせ（娘-母-父）だけでなく、両親の実父母との似より感（自分-実母-実父）をも取り上げ、一人の実子（娘：大学生）と絡ませたのが2003年の論文として纏まった。この研究からは、母親と父親の似より感が一致する場合（大大／小小の夫婦）では、娘も同じく大群／小群となる者が多くなった。夫婦間で一致しない場合（大小／小大の夫婦）は、娘の多くは父親に似るという結果が得られている。また、両親の実父母との似より感においてもかなりの相関が出たのである。これは驚きであった。

今回も、比較的新しい2000年1月と2001年1月に回収できたこの時のデータを、再度詳細に分析していきたい。家族の似より感（娘-母親-父親）の有効数は91組。両親の実父母との似より感もすべて揃っていたのは67組であった。まず、①実父母と両親の似より感、両親が築いてきた家族構成の中でどのような影響を与えているのかについて、2003年よりもっと詳しく相互の関係（かかわり方）を調べてみる（子どもについては一人の娘との関係しか取り上げられないが）。ついで、②娘の心の中に取り込まれている両親との似よりがどんなものであるのか。③それは母親・父親とどのような似より感の関係性をみせているのか。また、④秋山（2006）でも検討した自己の定位（空間軸・時間軸）やエゴグラムの自我状態との関わり方についてもどのようなものになっていたか等について追究したい。

#### 本研究の目的

1. 4領域（母対父：大大群，大小群，小大群，小小群）×娘（大と小群）という8つのグループに分けながら、両親における実父母の似より感、ついで、両親と娘の似より感の受け止め方（心内化の状況）を、継承的視点より詳細に検討する。
2. 秋山（2006）で到達した、人間としての全体性への螺旋的発達図（内在性・超越性・魂のプロセスを踏まえた）について、その後の一年間の学びを付け加えて行く。
  - ① いのちの次元において使われている「スピリチュアリティ（霊性）と魂の定義」
  - ② 「プロセス指向心理学」の提唱者ミンデル，A. からの学びほか
  - ③ 「その一瞬」の深い意味について…スピリチュアリティの生起

## 方 法

**対象者** 2000年と2001年に調査した女子大生（3年生）と両親の91組。ただし、この場合の分析は、家族の中の「娘（一人）-母親-父親」の間の似より感である。その内の67組の両親は、お互いの実父母との似より感についても記述してくれていた（実父は50歳過ぎ頃、実母については50歳頃として回答を求めている）。年齢構成は、父親の中央値50-54歳、母親のそれは45-49歳、娘21/22歳。

**実施月日** 1999年と2000年の冬休み直前の授業時に封筒に入れた調査用紙を配布し、2000年と2001年の1月に入って回収させてもらった。

**調査内容** 4つの人格認知因子（F1内向性12項目、F2自己顕示性9項目、F3誠実性14項目、F4明朗性7項目）とその他6項目で構成された性格調査を使用した。評定対象者ごとに頁をめくりながらチェックするやり方を取り、各項目は5段階で評定された（資料参照）。さらに、娘にたいしては、次に挙げる2種類の調査も依頼している。

① 自己意識：時間軸にそった自己の定位12項目／空間軸にそった自己の定位17項目

② 自我状態：杉田（1985）のエゴグラム・チェック・リスト（中高生用）50項目

1. 女子学生の両親については、各々の実父（50歳過ぎ頃）と実母（50歳頃）、自分自身、配偶者（夫／妻）と娘（調査用紙を持ち帰った）の5人を評定対象者とした（各々F1～F4）。
2. 娘には、休み期間中に「父親-母親-自分自身」の人格（性格）認知評定と自己意識（6件法）と5つの自我状態の評定をお願いした（CP, NP, A, FC, AC：各10項目で2, 1, 0点の3件法）。

**データの処理** 1. 親子の似より感2群の抽出：4因子42項目を用いて2群に仕分けた。まず、5段階を「はい」「?」「いいえ」の3段階に簡素化し直し、「?」の回答はカウントせず、「はい」と「いいえ」で回答された項目の数を七区分表示図の中に入れていく。その後、区分③に納まった項目数の多少で2群に分けていく（平均値以上：大群／平均値未満：小群）。

2. 評定対象五者（両親の場合）または三者（娘の場合）の性格：4つの因子について因子別得点を出す。因子を構成する項目の得点を加算し、各項目数で割った値である。逆転項目は（6- $\bar{x}_i$ ）変換。得点は、5.00～1.00の範囲に納まる。

3. 娘（女子学生）の自己意識：時間軸にそった自己の定位は、過去の危機・現在の自己投入・将来の自己投入の希求について各々4項目（6件法）で構成されているので、4～24点の間の得点となる（加藤1983）。空間軸にそった自己の定位では、F1自己受容、F2自己防衛、F3他者受容について得点化される。加算点を項目数で割るために、1.00～6.00点に納まる（梶田1988の項目を菅野が因子分析しなおしている）。

4. 娘の5つの自我状態：各々10項目で構成されているため、得点範囲は0～20点（杉田1985中高生用のチェック・リスト）。

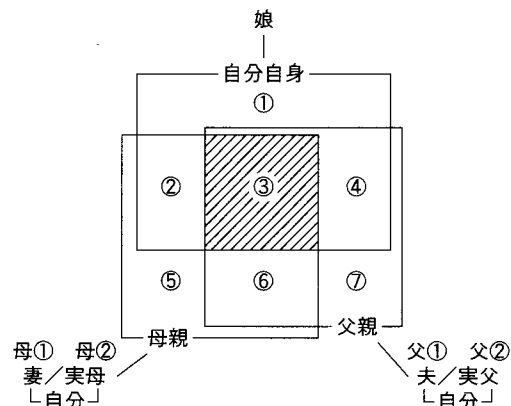


Fig.1 七区分表示図

## 結果と考察

大学生になった娘は、両親のどことどのように似よるのだろうか。三者関係から捉えることのできる今回の分析は、8タイプの親子のかかわり方（出方）の違いが研究の対象となる。

### 1. 2×2のマトリックスを用いた娘と父母の似より感分析

#### 1. 群分けについて

##### 1-1. 区分③の出現個数で分けた大群と小群について

3人の評定者が示している区分③の個数の平均とSDはTab.1-1のごとくである。「娘-母親①-父親①」のデータは91組、「自分自身（両親）-実母-実父」が揃っていたものはさらに少なくなり67組である（母親②／父親②）。4つの因子42項目で集計処理がなされている。

Tab.1-1 区分③の個数の平均とSD

評定者	区分③の出現個数				
娘	$\bar{X}$	13.9	母親②	$\bar{X}$	12.7
	(SD)	(7.8)		(SD)	(7.3)
母親①	$\bar{X}$	11.8	父親②	$\bar{X}$	12.8
	(SD)	(6.9)		(SD)	(7.7)
父親①	$\bar{X}$	12.8			
	(SD)	(8.8)			

全体N=91組

娘：自分-母親-父親

母①：娘-自分-夫

父①：娘-妻-自分

N=67組

母②：自分-実母-実父

父②：自分-実母-実父

データも追加されるため、娘大・小群の出方の差が小さくなってくる。ただし、領域1と領域4では大と小群の出現は両親と同じ似よりの者が多くなっている（Tab.1-3）。

Tab.1-4は、「母親①・父親①・娘」の組み合わせ8種における人数と評定者が取り出した七区分表示の区分③の平均個数とSDである。

##### 1-2. 家族の似より感と両親の実父母との似より感の関係性について

秋山（2003）が取り出した、「母親②／父親②」と「母親①／父親①」のかかわり方の差異

Tab.1-2 母親①と父親①のくみあわせからみた人数と区分③の平均とSD (単位：コ)

領域	くみあわせ		区分③の個数 $\bar{X}$ と (SD)		
	母①父①	n	娘	母親①	父親①
1	大大	27	17.3 (7.3)	17.7 (4.7)	19.2 (4.8)
2	大小	19	11.7 (6.8)	16.6 (5.4)	6.6 (3.2)
3	小大	17	13.5 (8.7)	6.6 (3.5)	20.9 (9.9)
4	小小	28	12.4 (7.3)	6.1 (2.6)	5.9 (3.2)

Tab.1-3 4つの領域×娘2区分の人数

		父親①	
		大	小
母親①	大	1. 娘大 18 小 9	2. 娘大 7 小 12
	小	3. 娘大 9 小 8	4. 娘大 10 小 18

N=91

大群： $\bar{X}$ 以上

小群： $\bar{X}$ 未満

娘は両親のどこと似よるのか

(67組のデータ)と娘の2群とのかかわり方の出方を、今回の4つの領域に当てはめながらその出現の状況をみてみた (Tab.1-5 領域3と4で1名の移動あり)。

実父母との似より感が、両親の認知する家族の結びつきにも大きな影響を与えていることがよく分かる (ただし、区分③に納まった個数の数の多少での分析)。母親①・父親①が共に大の場合や小の場合には、母親②・父親②でも大大群/小小群という認知をされた夫婦が多いのである。娘の場合にもこの事は言えるのであるが、24名減のしわ寄せがこの領域1と4に出てきている。つまり、実父母が両方とも記載されたデータが少なかったということである (領域1:7名減, 領域4:10名減)。これに対し、領域2と3は、実父母との似より感が反対の組み合わせの夫婦である。母親①・父親①では、やはり実父母との似より感をお互いに継承している者が多く出現する。

2代にわたっての性格認知が逆になっているのである。娘

(3代目)では領域2で父親の流れを汲む人が2倍近くの差を見せている。これは、2003年の論文通りであったのだが、領域3では1名の娘のデータが領域4より移動してきたため、やはり父親のながれを汲む者の方が多いけれど、そうでない娘との差は縮まっている (1.6倍増からほぼ同じに減)。このとき (2003年の論文)の結論では、「似たもの夫婦と娘、ズレている夫婦と娘の特徴がさらにクリアーとなった。女子学生にとっては、父親に対する認知的な受け止め方・あり方が、自己の確立において大きなテーマになる可能性を秘めているようである。」とした。

この度の分析では、両親の実父母とのかかわり方のデータと、その他として前回は除外された24名のデータをも合わせた詳細なかかわり方についてまとめ上げている。

Tab.1-4 「母①父①娘」のくみあわせによる人数と区分③の平均とSD (単位:コ)

領域	くみあわせ		区分③の個数 $\bar{X}$ と (SD)		
	母①父①娘	n	娘	母親①	父親①
1	大大大	18	21.6 (4.6)	18.1 (5.5)	19.7 (5.2)
	大大小	9	8.7 (1.9)	17.0 (2.4)	18.3 (4.0)
2	大小大	7	18.9 (3.6)	16.1 (6.9)	6.6 (3.2)
	大小小	12	7.5 (4.2)	16.8 (4.3)	6.7 (3.2)
3	小大大	9	20.0 (6.0)	6.6 (4.0)	23.9 (12.4)
	小大小	8	6.1 (4.7)	6.8 (2.9)	17.6 (3.5)
4	小小大	10	20.4 (4.7)	5.9 (2.3)	6.0 (2.6)
	小小小	18	7.9 (3.9)	6.2 (2.8)	5.8 (3.5)

Tab.1-5 母①父①のマトリックスで捉えた娘や母②父②の現れ方—2003年データとの比較— (単位:人)

		父 親 ①							
		大				小			
		1	2003			2	2003		
母	大		娘	母②	父②		娘	母②	父②
		大	14	16	15	大	5	12	3
		娘	6	4	5	娘	11	4	13
		小	27	20	19	小	16	16	13
親	①		娘	母②	父②		娘	母②	父②
		大	8	3	10	大	5	2	6
		娘	5	10	3	娘	13	16	12
		小	17	13	28	小	18	18	12

領域3と4に一部修正あり (2003データ)

## 2. 3代にわたる親子の似より感（区分③の個数）の出現の仕方について

大・小という2群でも、母親①・父親①／母親②・父親②と重ね合わせると、16組もの組み合わせとなる。これに娘2群を合わせると何と32組である。今回は、Tab.2-1のような表し方にしてみた。さらに、実父母のデータが片方だけだったりとか両方無記載の回答も取り上げている。領域1～4も表の中に付記されているので、非常に分かり易くてそのかかわり方が明瞭になっている。

Tab.1-5では母親②・父親②と娘のかかわりは見えてこなかったが、Tab.2-1では両親の認知している実父母（娘にとって

は祖父母）との似より感も一緒に捉えることができる。母親①・父親①の間にズレのある領域2と3では、父方の似より感を継承している娘の方が多いという結果がでた。領域1と4では大群系統は娘大群の者が、小群系統の家系（？）では娘も小群の者が多かった。一つひとつのどのような性格項目で同じように似ているかということは分からないが、区分③に入った項目の数の多少で見限りのにおいては、3代に渡る継承者が多くでてきたというのは面白い事実である。

母親①・父親①の2×2のマトリックスの中で表記し直したのが、Tab.2-2である。これまで除外されてきた24名のデータがどの領域に入るかが明らかとなってくる。

Tab.2-1 母①父①と母②父②のくみあわせ方と娘の二群を絡み合わせた出現人数  
(単位:人)

領域	父 - 母 - 娘 のかかわり方		実父母と親と のかかわり方		自分 - 母 - 父 のかかわり方		計	2003データ 分析
	母①	父①	母②	父②	大	小		
1	大	大	大	大	10	3	13	母① 父①
				小	2	1	3	大 大
			小	大	1	1	2	娘
				小	1	1	2	大 小
2	大	小	大	大	0	2	2	母① 父①
				小	3	7	10	大 小
			小	大	1	0	1	娘
				小	1	2	3	大 小
3	小	大	大	大	1	1	2	母① 父①
				小	0	0	0	小 大
			小	大	6	2	8	娘
				小	1	2	3	大 小
4	小	小	大	大	0	1	1	母① 父①
				小	0	1	1	小 小
			小	大	2	3	5	娘
				小	3	8	11	大 小

くみあわせ 母② 父②		娘								計
		領1		2		3		4		
大	一	大	小	大	小	大	小	大	小	
大	一	1	1	1	1	1				5
一	大	1				2				3
小	一		1			1		4	3	9
一	小							1	1	2
一	一	2	1	1				1		5

## 3. 4つの因子別得点をもとにした3評定者ごとの親子の似より感の関係性について

### 3-1. 3人の評定対象者に対する3評定者の4つの因子別得点の平均と（SD）

3人の評定者が捉えた評定対象者（3人）ごとの因子別得点の平均とSDはTab.3-1に示した通りである。ここからは、母親②と父親②のデータを削除し、母親①・父親①・娘の三者の比較検討を試みてみたい。各々の平均値を基にしてそれ以上を「H」、それ未満を「L」に仕分けした。領域1～4を一括して載せることは紙面上難しいので、領域1／2、3／4をペアーにして示し、文章でもって三者間の3評定対象者の類似と差異について見比べていく。

## 娘は両親のどこと似よるのか

Tab.2-2 91組すべてのデータを2×2のマトリックスに取り込んだ場合 (単位 人)

		父 親 ①													
		大						小							
母 親 ①	大 娘	1	母② 父② n			母② 父② n			2	母② 父② n			母② 父② n		
		大	大	大	10	大	—	1	大	大	小	3	大	—	1
			大	小	2	—	大	1		小	大	1	—	—	1
			小	大	1	—	—	2		小	小	1	2		
			小	小	1	4				5					
			14												
		小	大	大	3	大	—	1	小	大	大	2	大	—	1
			大	小	1	小	—	1		大	小	7	1		
			小	大	1	—	—	1		小	小	2			
			小	小	1	3				11					
			6												
		小 娘	3	母② 父② n			母② 父② n			4	母② 父② n			母② 父② n	
大	大		大	1	小	—	1	大	小	大	2	小	—	4	
	小		大	6	1				小	小	3	—	小	1	
	小		小	1					5			5			
	8														
小	大		大	1	大	—	1	小	大	大	1	小	—	3	
	小		大	2	—	大	2		大	小	1	—	小	1	
	小		小	2	3				小	大	3	—	—	1	
	5						小		小	8	5				
							13								

Tab.3-1 3評定者の3評定対象者ごとにみた「F1～F4」の得点の $\bar{X}$ とSD

評定者	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
娘	自 分				母 親				父 親				
	$\bar{X}$	3.1	3.1	3.4	3.6	2.6	2.7	3.8	3.7	2.4	3.0	3.8	3.7
	SD	0.6	0.6	0.5	0.7	0.5	0.7	0.5	0.6	0.6	0.8	0.6	0.7
母親①	娘				自 分				夫				
	$\bar{X}$	2.7	2.4	3.7	3.7	3.0	2.6	3.5	3.3	2.6	2.9	3.6	3.3
	SD	0.4	0.6	0.4	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.7	0.6	0.6
父親①	娘				妻				自 分				
	$\bar{X}$	2.8	2.6	3.6	3.6	2.7	2.7	3.6	3.4	2.8	2.8	3.6	3.3
	SD	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.6	0.4	0.6

## 3-2. 領域1（母親①大群・父親①大群）について

HとLの間で2倍以上の出現差（人数）をみせた因子を抽出しながら比較していく。

娘大群では、娘は三者共にF3誠実性とF4明朗性でHの者が多い。母親では、F4については同じ出方をしているが、「自分」についてはF3の差はでない。両親の間では、F1内向性がすべてに共通（L>H）、F2自己顕示性については娘は「母親」のみH<L、母親では「自分」においてH<L、父親は「娘」と「自分」でやはりH<Lとなった。

娘小群ではどうだろうか。娘では「自分」と「母親」でF1がH>L, F3・F4がH<Lとなる（「父親」ではF4のみがH<L）。この出方は、前述の娘大群とは逆である。両親の認知ではF2が父親の「自分」の場合を除き自己顕示性の低い者が多い（H<L）。F3に関しては「自分・妻・夫」でH>Lとなり、誠実であると見なしている（ここでも父親の「自分」は除かれる）。この領域1では両親が共に大群であるが、娘が大群か小群かで因子ごとにみた出現（HとLの現れ方）にはかなりのズレ（差異）、あるいは逆転現象が生じている（Tab.3-2）。

Tab.3-2 領域1における三者のF1～F4で捉えたHL分析

		父 親 ① 大																											
母 親	娘 大 18	領域 1																											
		(人数)																											
		娘								母親①																			
		自 分				母 親				父 親				娘				自 分				夫							
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4								
		H	7	9	16	17	5	5	13	13	5	10	14	12	11	11	5	6	13	13	7	4	14	11	5	6			
		L	11	9	2	1	13	13	5	5	13	8	4	6	13	14	4	5	13	10	4	7	13	14	5	7			
		H: $\bar{X}$ 以上 L: $\bar{X}$ 未満																											
		①	娘 小 9	領域 1																									
				(人数)																									
娘								母親①																					
自 分				母 親				父 親				娘				自 分				妻				夫					
F1	F2			F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4				
H	6			3	3	2	7	6	3	2	5	4	4	3	5	1	4	4	6	1	7	5	5	2	7	6			
L	3			6	6	7	2	3	6	7	4	5	5	6	4	8	5	5	3	8	2	4	4	7	2	3			
F1: 内向性 F2: 自己顕示性 F3: 誠実性 F4: 明朗性																													

Tab.3-3 領域2におけるHL分析（3者ごとの3つの評定対象）

		父 親 ① 小																								
母 親	娘 大 7	領域 2																								
		娘 (人数)												母親① (人数)												
		自 分				母 親				父 親				娘				自 分				夫				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
		H	2	4	5	2	5	3	4	3	2	2	6	4	5	2	7	4	4	4	4	5	3	3	7	5
		L	5	3	2	5	2	4	3	4	5	5	1	3	2	5	0	3	3	3	3	2	4	4	0	2
		H: $\bar{X}$ 以上 L: $\bar{X}$ 未満																								
		父親① (人数)																								
		娘												妻				自 分								
		H	5	4	5	4	6	7	1	2	4	2	3	2	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
L	2	3	2	3	1	0	6	5	3	5	4	5	2	3	2	3	1	0	6	5	3	5	4	5		
①	娘 小 12	母親① (人数)																								
		娘												自 分				夫								
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
		H	7	4	4	4	4	4	7	8	8	2	6	3	7	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
		L	5	8	8	8	8	8	5	4	4	10	6	9	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
		F1: 内向性 F2: 自己顕示性 F3: 誠実性 F4: 明朗性																								
		父親① (人数)																								
		娘												妻				自 分								
		H	6	7	4	4	6	8	4	8	9	7	3	2	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
		L	6	5	8	8	6	4	8	4	3	5	9	10	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5



娘は両親のどこと似よるのか

### 3-3. 領域2（母親①大群・父親①小群）について

2003年の論文では、父親の系統に似ていた娘が多かった領域である。娘大群（区分③では母親似）では、「娘」について三者ともF3はH>L、娘が両親の認知と逆になっているのはF1で、内向的と見られているのに自分はそうではないと見ている。母親と父親の間では「自分・妻」と「夫・自分」で認知上の逆転（F4：母親のほうがプラスで父親はマイナス的判断）。父親は「妻」に対してF1～F4のすべてにマイナス的であるのに、母親は自分については半々に分かれた。娘は「父親」には好意的である。

これに対し、娘小群（区分③では父親似）は、「自分・娘」で三者が共にF3・F4でマイナス

Tab.3-4 領域3における三者のF1～F4で捉えた3評定対象者のHL分析

		父 親 ① 大															
母 親 ①	娘 大 9	領域3															
		娘 (人数)								母親① (人数)							
		自 分				母 親				父 親				自 分			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
		H	3	4	7	7	2	3	6	2	3	6	8	H	5	2	7
	娘 小 8	L	6	5	2	2	7	6	3	3	7	6	3	L	4	7	2
		父親① (人数)															
		娘				妻				自 分				夫			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
		H	2	3	8	8	5	3	7	7	3	3	7	H	4	4	3
		L	7	6	1	1	4	6	2	2	6	6	2	L	5	5	6
		母親① (人数)															
		娘				妻				自 分				夫			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
		H	5	4	2	7	2	4	2	3	6	2	3	H	4	4	3
		L	3	4	6	1	6	4	6	5	2	6	5	L	5	5	6
		父親① (人数)															
		娘				妻				自 分				夫			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
		H	2	3	4	8	6	2	8	4	5	2	4	H	4	4	3
		L	6	5	4	0	2	6	0	4	3	6	4	L	5	5	6

H:  $\bar{X}$ 以上  
L:  $\bar{X}$ 未満

F1: 内向性 F2: 自己顕示性  
F3: 誠実性 F4: 明朗性

Tab.3-5 領域4におけるHL分析（3者ごとの各F1～F4）

		父 親 ① 小															
母 親 ①	娘 大 10	領域4															
		娘 (人数)								母親① (人数)							
		自 分				母 親				父 親				自 分			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
		H	5	5	8	8	4	5	7	7	8	5	7	H	7	7	3
	娘 小 18	L	5	5	2	2	6	5	3	3	2	5	3	L	3	3	7
		父親① (人数)															
		娘				妻				自 分				夫			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
		H	7	6	2	6	5	5	1	3	6	6	4	H	5	5	9
		L	3	4	8	4	5	5	9	7	4	4	6	L	8	5	4
		母親① (人数)															
		娘				妻				自 分				夫			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
		H	12	12	4	8	10	14	5	6	9	12	8	H	12	8	9
		L	6	6	14	10	8	4	13	12	9	6	10	L	9	6	10
		父親① (人数)															
		娘				妻				自 分				夫			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
		H	10	12	4	9	13	11	2	6	8	12	6	H	10	12	4
		L	8	6	14	9	5	7	16	12	10	6	12	L	9	6	10

H:  $\bar{X}$ 以上  
L:  $\bar{X}$ 未満

F1: 内向性 F2: 自己顕示性  
F3: 誠実性 F4: 明朗性

判断、「父親」のF4も同様にマイナス的で明朗でない。両親間ではこのF1とF4で似た傾向を出している。内向性は高く、明朗ではないとみる夫婦が多いのであるが、その他の因子では一致しない (Tab.3-3)。

#### 3-4. 領域3 (母親①小群・父親①大群) について

この領域では逆に娘大群が父親似、娘小群が母親似ということになる (Tab.3-4)。娘大群では、娘と父親の各因子における出現の仕方には多くの共通性が見られ、プラス的な認知が成されている。一方、母親では、「自分」についてF3では逆になったり (マイナス判断者多)、他では差が見られない。

娘小群では、三者の認知にはかなりのズレが生じているのがよく分かる。各因子の認知において逆転現象が見られるのである。娘の「自分」「母親」「父親」の捉え方におけるズレは顕著である。夫婦間においても同じ事が言えるように思うが、「夫・自分」のF2自己顕示性については低いとみなされている ( $H < L$ )。一方、娘は「父親」をHとみている者が多い。

#### 3-5. 領域4 (母親①小群・父親①小群) について

娘大群では、娘の認知がF3・F4で $H > L$ なのに、両親のみる「娘」のF3は逆 ( $H < L$ ) で誠実ではないとみている。F1も内向的であるとみる親が多かった。一方、両親の間では「自分・妻」ではF3・F4の見方は一致 ( $H < L$ )。「夫・自分」に関してはF3とF4にズレが生じていた。父親の場合は「娘」F3、「妻」のF3・F4では逆の $H < L$ の認知である (母親の場合とは共通)。

娘小群は、三者とも小小小となった群であり、出現数も大大大と同じ18名の家族が位置づけられている。娘は「自分」にかんしては領域1の娘小群とよく似た出方をしているとも考えることもできるが、HとLの差が出ない因子が増えているのも確かなことである。両親の間でも見方は共通するものが多い。特に、「自分・妻」のF3・F4 ( $H < L$ )、「夫・自分」のF2 ( $H > L$ ) でマイナス的評価が強くなっている (以上Tab.3-5)。

以上の諸々の分析は人格 (性格) 認知上での結果ではあるが、これらからどういうことが言えるのであろうか。母親と父親の組み合わせ (4種) の違いと、さらにそれを娘大群・小群に仕分けた場合、娘が両親のどこどのように似よったか。たった4つの因子のみで比較検討した場合でも微妙なそして特徴のある質の違いが現れてきた。8つの家族の組み合わせで生じているこの認知上での差異というものは、臨床に視点を置き換えた場合にはさらに複雑化していき、とうとう最後には現象学者のヴァン・デン・ベルク (1982) が「人とは何か」を見つめ続けて出した結論に至る道程を辿ることであろう。彼の見立ては、「人間の生は変化し続けるのだ」と「人間は一人ひとり違うのだ」ということなのである。

この度の ( $2 \times 2$  マトリックス)  $\times$  娘大・小群から抽出された8通りのHL分析は、青年期にある女子学生とその両親 (さらには両親の実父母) について、発達途上にある家族関係の一側面を垣間見るよい機会となった。娘は確かに両親のどこかに似よるかづれていくのである。

#### 4. 娘 (女子学生) の捉えた自己意識と自我状態について

Tab.4-1は、自己意識と自我状態の平均とSDである。この平均を基にしてH (高得点の者) とL (低得点の者) の人数を抽出した。

総じて娘大群と小群の自己意識や自我状態には、領域を越えて共通した差異がみられた。

娘は両親のどこと似よるのか

Tab.4-1 娘の自己意識と自我状態の平均とSD

定評者		自 己 の 定 位						エ ゴ グ ラ ム				
		時 間 軸			空 間 軸			自 我 状 態				
		過 去 の 危 機	現 在 の 自 己 投 入	将 来 の 自 己 投 入 の 希 求	F1 自己受容	F2 自己防衛	F3 他者受容	CP	NP	A	FC	AC
		娘	SD	17.0 3.2	15.9 3.5	16.6 2.7	3.1 0.7	4.0 0.7	3.9 0.9	10.6 3.2	15.1 3.0	11.6 2.9
		レンジ： 4～24点			レンジ： 1.00～6.00			レンジ： 0～20点				

Tab.4-2 領域1と2の娘の自己意識と自我状態のHL分析

母  
親  
大

①

父 親 ①													
大										小			
領域 1										領域 2			
娘 (大) (人数)										娘 (大) (人数)			
	自己意識						エゴグラム						
	時間軸			空間軸			自我状態						
	過去 の危機	現在 の自己 投入	将来 の自己 希求	F1 自己 受容	F2 自己 防衛	F3 他者 受容	CP	NP	A	FC	AC		
	H	12	13	12	10	9	12	12	14	10	12	8	
L	6	5	6	8	9	6	6	4	8	6	10		
										18			
娘 (小) (人数)										娘 (小) (人数)			
	自己意識						エゴグラム						
	時間軸			空間軸			自我状態						
	過去 の危機	現在 の自己 投入	将来 の自己 希求	F1 自己 受容	F2 自己 防衛	F3 他者 受容	CP	NP	A	FC	AC		
	H	2	3	3	5	4	5	3	2	4	4	6	
L	7	6	6	4	5	4	6	7	5	5	3		
										9			

9

父 親 ①													
大										小			
領域 1										領域 2			
娘 (大) (人数)										娘 (大) (人数)			
	自己意識						エゴグラム						
	時間軸			空間軸			自我状態						
	過去 の危機	現在 の自己 投入	将来 の自己 希求	F1 自己 受容	F2 自己 防衛	F3 他者 受容	CP	NP	A	FC	AC		
	H	2	6	4	4	1	4	5	5	5	5	3	
L	5	1	3	3	6	3	2	2	2	2	4		
										7			
娘 (小) (人数)										娘 (小) (人数)			
	自己意識						エゴグラム						
	時間軸			空間軸			自我状態						
	過去 の危機	現在 の自己 投入	将来 の自己 希求	F1 自己 受容	F2 自己 防衛	F3 他者 受容	CP	NP	A	FC	AC		
	H	3	4	4	5	8	5	4	2	4	7	8	
L	9	8	8	7	4	7	8	10	8	5	4		
										12			

12

#### 4-1. 自己意識について

時間軸にそった自己の定位では、領域1～3の娘大群において現在に自己投入しているHの者が多い。逆に、小群では領域1・2においてLの方が多くなっている。その他の特徴的なこととしては、過去の危機の問いかけに対して「あった」とする者（H）が領域1の大群においてのみ多く出現し、領域1・2の小群と領域2の大群では危機は少なかった（L）と回答した者が多数を占めている。領域3・4では、大・小群にこの差は現れていない。将来の自己投入の希求については、小群はすべての領域において低い者（L）が多い。この心理状況はどうしてなのだろうか。未来志向に思いが向けられないためなのだろうか。次に、空間軸にそった自己の定位について述べてみよう。領域1・3・4の大群においてはF3他者受容（H）の者が多い。F2自己防衛では、領域2の小群でH者、領域2と3の大群のL者の出方が目をひく。領域

Tab.4-3 領域3と4の娘の自己意識と自我状態のHL分析

母 親 小 ①

父 親 ①																
大										小						
領域 3										領域 4						
娘 (大)										娘 (大)						

3の大群（父親似）はF2自己防衛を低くしてF3他者受容をしている者が多いという認知の仕方は他の娘たちと比べて少し気にかかる点ではある。領域4の大群がF1自己受容とF3他者受容において共にHの者が多いというのはどう捉えればよいのだろうか。両親の似より感が共に小のペアーだから反動的な形成になってきたのだろうか。これも面白い結果である。

#### 4-2. エゴグラムからみた5つの自我状態について

NP（いわゆる母親の心）では、大群と小群でまったくといってよいほどの逆転傾向にある（但し、領域3の娘小群は除く）。NP的心内化の差異がはっきりとした形で人数に現れているのが驚きである。CP（いわゆる父親の心）は、領域1と2に限定されるのだが、大と小群で出現に差をみせた。A（大人の自我状態）については、領域2～4の大群にH者が多く、逆に領域2と3の小群はL者で占められていた。C（いわゆる子どもの心）はどのような現れ方をしたのだろうか。FC（自由な子どもの心）：娘大群のすべてにおいてH>L（2倍以上の差）となっていた。（領域4の大群は9対1である）。娘小群ではHとLの出現人数に顕著な差は見られていない。AC（順応した子どもの心）：小群において領域3を除いた3つでH者が多く出現した（すべてが2倍の差）。5つの自我状態の受け止め方のこの大きなズレは、今後の人生にどのような影響をもたらしていくのだろうか。娘みんなが幸せな人生を歩んで欲しい。

娘（女子大生）の心内化プロセスとして、この度の結果を捉え直してみよう。「親のどこと似よるのか」というテーマは、F1～F4の因子でみた場合からもエゴグラムの5つの自我状態で捉

えた場合においても、見事といってもよいような形で、娘大群と小群の似より感の違いを浮き上がらせた。18番目のこの論文に辿り着くまでの長い道行きは決して無駄ではなかったと確信できたのが、何よりのこの度の収穫であり喜びでもある。

## Ⅱ. 秋山（2006）以後一年間の理論構築の補強作業について

2005年の後半における静養は、心をリフレッシュさせ、新しい理論の誕生とその結実化をもたらしてくれた。静養中は何事も進展せず、ただただ悲嘆の中で過去を振り返り、未来に対する活路はまったく開けない鈍詰まり状態のただ中にあった。

しかし、2年たった今はすべてが有り難く、光り輝く自然を愛でたり、時折は光り輝く自分を実感している。疲れてはいても生活は充実感に溢れている。とにもかくにも1年をかけて本を再読し続けた。主に、トランスパーソナル系の本から開始し、心理学だけでなく宗教系まで幅広くである（岡野、藤見、諸富、ウイルバー、K., ミンデル、A., ヴィーダマン、F., フランクル、V. E., 岩田、横山、加島、谷川、梅原、内山、河合、伊藤他）。岡野（2000）は、4年次のテキストとして3年間学生と共に講読し、毎年読み方が変化し続けている。ミンデルを紹介し、自分の持論も纏めている藤見（2004）の本は、2007年度の院の演習で院生5名と共に深読みした。授業が待ち遠しい充実した時間に変化していく楽しさを味わった。印象に強く残った著者達の辿り着かれた心境をこれから少し紹介したい。この度は、加島、岩田とミンデルを取り上げ、トランスパーソナルとはどういうことなのか、『含んで越える』という意味とは何かについて、理論の補強作業に入りたい。これは、魂（ソウル）と霊性（スピリチュアリティ）の新しい仕分け作業でもある。

まず72歳で英訳と漢文をもとに老子の道徳教81章・「タオ」を自由訳した加島（2000）に注目してみたい。彼は「自然との感応」を70歳頃実感する。NHK教育:こころの時代（再）をたまたま7月8日14:00～15:00の放送で見聴することができた。タイトルは『内なる風に吹かれて』、聴き手は浅井靖子ディレクター、加島祥造氏は84歳であった。彼の肩書きは最初詩人・英文学者で紹介され、番組の後半にさしかかると詩人・墨彩画家と字幕が変更されていた。放映中、話の内容をメモした。その中から「自己を越える（トランスパーソナル）」とはどういう事なのか、彼の言葉で箇条書きにしながらかき出してみよう。

1. 生きてきた自分とは違った目に見えない世界がある。（無縁ではない存在）・意識的には霧が突然晴れた状態
2. 目標があって動いているときは、周りの音が捉えられないのに、ゆっくりゆっくり動いていくと、見えなかったものがたくさんあることに気づいた。川の流れの音を聴きながら河原で寝ころびまどろんだ後、目覚めた時数秒間石やら草やら木と一体化していた。気づくと消えてしまった。
3. 頭で見る世界ともう一つ別の世界があるという実感。自分を動かしているもの（エネルギー）が心にもあらゆるものの中にもある。伊那谷に来て、目的のない世界から見るとよく見えるものがあつた。ゆっくり歩いていると、風の正体を実感としてみる事ができた。
4. 谷を緑で埋め尽くすものは「水」！自分の中にもこの「水」の流れがある。
5. 虚（うつろ）で開いているからこそ、家の有用性があるのだ。ものの中に「虚（きょ）」のスペースがあることが真理の世界なのだ。
6. 「タオ」の方向：状況が変化しても、生きている存在そのものとして次に何があるかを求めて生きている。＊何とか生かそうとする方向に「タオ」は流れている。

7. 自然を越えたものと「共に生きる」「柔らかいものを上にする」。
8. どんな木でも根の部分は大地に張り出し、お互いに棲み分けあっている。林が強いのは、根が絡まり合っているからである。ネイチャーは、絡まり合うことで共存しようとしてきたのではあるまいか。＊「絡まり合うことは喜びだよ」
9. タオは、万物の母。みんなその母から生まれてきた子なのだ。それが、タオのやさしさを知ることになる。そうと知ったら、母親の懷に帰ろう！小さい個を包み込む全体。それが、粘り強さを与え、安らぎのもとになる。  
彼は、2006年の理論図の右の世界と左の世界のかかわり方を、タオという視点で話されているのではなかろうか。

次は、岩田（2005）の辿り着いた新境地を抜き出してみた。彼は道元の境地を垣間見ることのできた人である。ユングは「共時性」という現象について触れている。この共時性を、岩田は『同時の現象』と置き換えて論述を推し進める。彼の受け止めた道元の「宇宙」とはどのようなものだったのだろうか。

1. 時空の仮説を排除せよ。→ 捨てる・離れる・常識を越える  
おのれ自身を透明な鏡に転化せよ。身体そのものを鏡にする。
2. 眼前の山水が曇りなく見える。大切なことはそれだけである。  
道元の方法：われわれの眼をおおっている眼に見えないフィルターを外すこと。  
常識を越えるとは→部分に注がれる視覚、一面的なものの見方を捨て全体を見ろということでもある。
3. 曇りなくみるということ。…道元：山水が山水として見えること
  - ① 山水はそのままで古仏…心身一如の立場
  - ② 山水と古仏がその存在を自由に変換する…無上の功德
  - ③ 山水と古仏がともに法位にある…法位は絵の背景（柄に対する地）
4. 結局は一つなのである。一つの世界、一つの宇宙の本質なのである。  
「二にして一、一にして二という関係」  
身体と靈魂、人間と仏：両者はたがいに異質のものである。断絶あり、切れ目があるにもかかわらず、たがいに通ずるところがあり、相覆うところがある。
5. 人間と人間、人間と自然、人間と仏祖が一対一対応をしたとき、そこに自由に流通する世界が現出する。対応する場がひらけるといってもよい。対応し、対峙し、断絶をあいだとして対面していたもののあいだに流通するものが生まれる。いや、すべてが光明に包まれることになる。
6. パターン（諸相）と非パターン（非相）を同時に見る。それができる「同時」という場所にたどりつく。そうすれば如来が見えてくる。  
道元：そういう場所、諸相と非相とを同時に見る（見えるのではなくて）事の出来る場所。その仕掛けを「古鏡」という。  
鏡をのぞきこみ、鏡に対するものは、すべてその姿がありのままに映った。しかし、同時にそこで人間は人間に出逢った。単なる個をこえた本来の人間に出逢った。
7. 「見る」から『見える』に変わる。…「心身脱落しきたる」  
折り返し地点を廻るとまわりの風景がそれまでとは違って見える。
8. 折り返し地点に達したとき、そのときに一挙に全宇宙がその全体像をあらわす。

水中と水上、内と外、諸相と非相が同時にキラリと見えたのである。

二元ではなくて一元の世界が、おのれの足もとから開かれていく。それを実感！

9. ものがキラキラとかがやき、世界がキラキラとかがやく。個物と全体が、そこでキラキラとかがやいてたがいに相侵することがない。…同時発心あり、同時発時なり
10. 眼前の風景それがどのように見えるか。大事なものはそれだけである。…われの場所に坐って眺めると、そこからそこへキラキラと光る場がツブツブと連なっているように見える。そういう場から構成される宇宙、それが道元の宇宙なのでは…！

ミンデル、A. はプロセス指向心理学 (POP) の提唱者である。昨年の論文では、ヴィーダマン、F. の「魂のプロセス」で理論の進展をみせた。この共通な「プロセス」という用語に注目し、ミンデルのことにも少し触れたのである。彼は、物理学 (量子物理学) を研究していた学者であるが、ユング教育研究所で教育分析を受け、ユング派の治療者となった。その頃大変な病気に罹り、苦しみながら自分の力で回復し、その体験を基にして独自の治療法を創り上げていく。諸富 (1999) の解釈では、「人生を一切の自然の流れ (プロセス) と捉えて気づきを得ていく」のがPOPとのことである。プロセスの使い方には大きな違いのあることが分かった。諸富は「スピリット」と「ソウル」の違いにも言及してくれている。前者はこの世を越えた真理をひたすら追い求めていくときの心の働きであり、後者は肉体や大地にしっかりと根ざした女性的な調和の感覚であると記す。これを、ヒルマン、J. はスピリットは山のかなたを目指すこととし、ソウルは深い深い谷間を想うこととしているらしいのである。ミンデルはドリーミングの視点に立ち、スピリチュアルな解釈と心理学的な解釈を駆使している。前者は「それ」の視点、後者は自分の視点である。夢の創造主の顕現として夢を理解する。と同時に自分自身の一部として身体と夢を理解するのである。痛みの創り手と痛みの犠牲者は共に自分のなせるものと考えるところに新しい心と身体の治療法が姿をみせてきたのである。「傷と癒し手」あるいは「傷と症状の創り手」という相反する二つのイメージで一つの全体が成立するという理解である。一定の距離をとり、じっと見守り (瞑想し)、対話するのである。つまりは、身体と夢は沈黙の力からのメッセージなのである。ドリーミング→ドリームランドは、非合意的現実なのであり、顕在化している意識は合意的現実位置する。この二つの現実の閾を越え自覚を高めることは可能であるとみている。潜在的可能性の自覚化である。

これまで40年にわたって私なりに取り組んできた“フランクルの辿り着いた地点”を紹介したい。①“私の底の底のいのちにおける「精神的無意識」”。②自他の区別なく、私と世界、私と宇宙は一つである。③深いいのちの底に人生からのメッセージが届けられている：「自己根底のいのちの働きが真の主体」。これらの彼が到達した考え方は、ミンデルの解くPOPと歩を一にするものではないだろうかと思うこの頃なのである。

秋山の全体性への螺旋的発達図 (2006) は、潜在下 (化)、閾値、「その一瞬」の三つのキーワードを同時に考えることでその姿を現したものである。これに加島と岩田の自然の捉え方やミンデルのPOPを取り込んでいくならば、新しい視界が開けてくる。ミンデルのワールド・ワークでの対話では、人間と場を重視している。症状の犠牲者、症状の創り手、拘束し抑えつけようとする部分は、共に場自身の表現の現れなのである。ここにはこれまで取り上げてはいたが内容的に踏み込めなかった『場』という視点が重みを増す。右の世界からは手に取るように左の世界は分かる (見える) のだが、左の世界からは右の世界は決して見る事は出来ず、その存在さえ分からない人々が多い (和田)。潜在下の右の世界の螺旋的進行は少し早めの歩みを

する。これに対し、左の世界の受け止め方は少し遅れて逆方向の螺旋的発達を進める。これが日常の非合意的意識と合意的意識の状態である。ところが、ある時ある場所では一瞬の出来事として共通の場が発生することがある。右と左の螺旋が合流するのである（沈黙の力による軌道修正）。すると、変性意識状態化し、「ハッ」とする瞬間が生起する。ミンデルは、素粒子とは「波動であり、物質である」とされる量子物理学をもとに、心（身体と夢を含む）もそれに逆らわないとみている。これは横山（1987）の“素粒子-私（個人）-宇宙”とも共通する考え方である。スタートからゴールまでのプロセスは様々であり、因果律ではない縁起の世界である。それは共時性の可能性を示唆しているし、岩田の『同時の現象』でもある。十牛図の第八図「空一円相」から第九図「返本還源」（生きとし生けるものすべてとの共感）の世界（場）であろう。その一瞬の場に生起した魂のプロセスは響き合い作動を開始する。Self と ego の循環はそこに心の磁場（波動場）を作り出す。ヒルマンの「ソウル」であり、ヴィーダマンの魂のプロセスの成せる技ともいえようか。この変性意識状態の中で右のセルフ（Self）と左のエゴ（ego）は波動を生起させ、螺旋の接点で共振し、「含んで越える」。その共振が一点での心の発火を引き起こし、その一瞬に閾を越えてスピリチュアリティ（霊性）の螺旋が立ち上がる。時と場の折り合いが付けば、いつでも閾を越え、それは積み重ねられていく。心の財産と化していくのである。いつの日にかそれらは体験された宇宙意識として実感できるのではあるまいか。ほんの一瞬の出来事から少しは持続した体験（の積み上げ）として…。たとえ左の世界から右の世界を垣間見することは出来ないとしても、その存在に触れたという実感くらいは味わえるのではなからうか。

いつの間にか年を重ね、64歳という今日を楽しめるようになりかかってきた。生きてきてよかったとしみじみと想うのである。もちろんのこと妻との二人三脚で、いやいやご先祖さんのお陰で！人生を重ねてきた自分という存在者は、人格形成（人柄造り）を続けていくのであるが、決して違った人物に変身するというものではなかったようだ。今のここでの私に何らの変

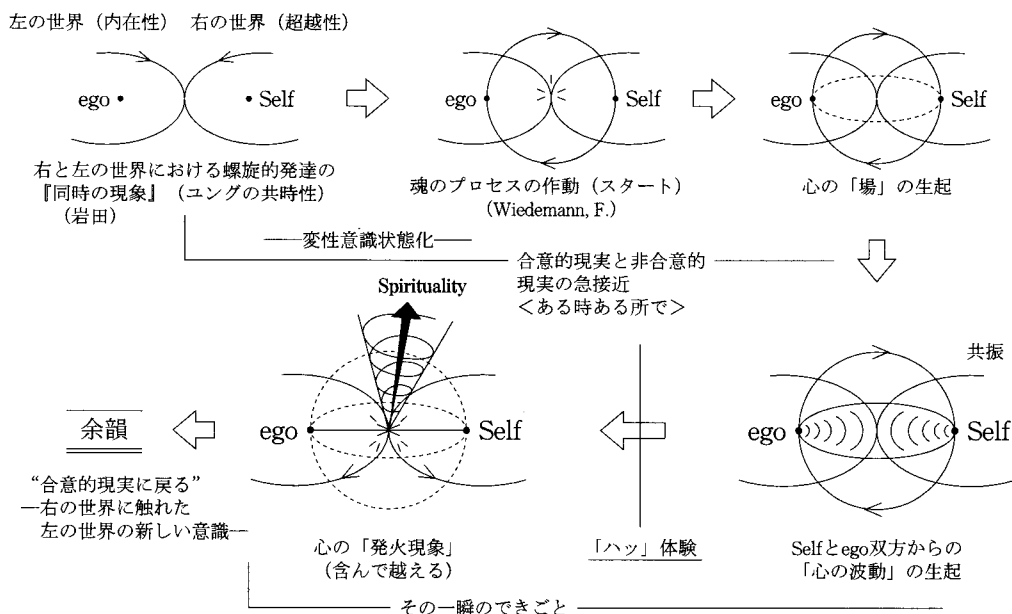


Fig.2 閾値を超えたその一瞬からスピリチュアリティの生起までの模式図



身なし。但し、変性意識状態化では希有な体験ができるのかも。この感触は、幼い頃に気付くことなく触れ合った体験の再現であり、これが宇宙意識と言われているものなのかもしれない。

文 献

- 秋山幹男 1968 回避反応におよぼす消去法の効果 広島大学大学院教育学研究科修士論文抄録 70-74
- 秋山幹男 1969 シロネズミにおける回避反応の消去と消去法の関連について 動物心理学年報 19 1-16
- 秋山幹男 1973 全体的な場よりみた条件性回避反応の消去と消去法の意義 異常行動研究会編 行動病理学シンポジウム 誠信書房 90-111
- 秋山幹男 1974 消去期の推移からみた往復回避反応に対する消去法の有効性 異常行動(PBD)研究会誌 14 12-20
- 秋山幹男 1974 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 8 23-38
- 秋山幹男 1980 女子学生における自己と父母の認知について(2) —4年間の縦断的研究— 広島文教女子大学研究紀要 15 45-74
- 秋山幹男 1981 女子学生における自己と父母の認知について(3) —タイプ分析の試み— 広島文教女子大学研究紀要16 61-72
- 秋山幹男・有馬道久 1985 女子学生における自己と父母の認知について(4) —因子別得点をもちいたクラスター分析の試み— 広島文教女子大学紀要 20 57-68
- 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について(5) —三者間の似よりにもとづく分析— 広島文教女子大学紀要 人文・社会科学編 23 83-102
- 秋山幹男 1992 親子の「似より」と女子学生の性格の関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
- 秋山幹男 1993 親子の似よりと自己受容について—女子学生における理想自己と現実自己のズレ— 広島文教教育(広島文教女子大学教育学会) 7 29-48
- 秋山幹男 1994 教育相談について想うこと—「今、ここで」の大切さとは— 教育相談年報(広島文教女子大学) 創刊号 32-45
- 秋山幹男 1994 「親子の似より」研究の現状とパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
- 秋山幹男 1997 親子の似より(感)の推移について—女子学生を対象にした4年間— 広島文教女子大学紀要 32 149-163
- 秋山幹男 1998 親と子のかかわり(第4章) 神原雅之・秋山幹男・有馬比呂志編著 心をはぐくむ幼児教育 溪水社 56-74
- 秋山幹男 1998 「内なる他者」を見つめる目 広島文教女子大学紀要 33 103-117
- 秋山幹男 1998 成人女性(母親)の実父母との似より感について—女子学生をもつ母親の性格認知— 日本心理学会第62回大会論文集 37
- 秋山幹男 1998 成人女性のみた夫・自分・娘の性格認知 —実父母との似より感をベースにした分析— 日本性格心理学会第7回大会発表論文集 78-79
- 秋山幹男 1999 女子学生とその両親が捉えた性格の相互認知 —似より感とズレ感をもとにした分析— 広島文教女子大学紀要 34 41-54
- 秋山幹男 1999 母親と娘(学生)の捉えた三者間認知 —「夫-自分-娘」と「父-母-自分」の似より感を中心に— 日本性格心理学会第8回大会発表論文集 88-89
- 秋山幹男 2000 若い母親の養育態度と親子(幼児)の性格認知—実父母との似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 35 113-126
- 秋山幹男 2001 女子学生をもつ父親と母親における「娘・自分・配偶者」の似より感 —実父母との似より感も合わせた性格の世代間伝達について— 日本性格心理学会第10回大会発表論文集 110-111
- 秋山幹男 2001 時間軸と空間軸からみた自己の定位—女子学生の親子の似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 36 63-82
- 秋山幹男 2002 心理学的健康と時間軸にそった自己意識 —女子学生の親子の似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 37 145-163
- 秋山幹男 2003 発達心理学から見た子どもの問題 藤土圭三・秋山幹男・中丸澄子・小早川久美子編著 地域に生きる心理臨床 北大路書房 235-243
- 秋山幹男 2003 両親の実父母との似より感と家族間の性格のかかわり方 —女子学生とその両親について— 日本心理学会第67回大会発表論文集 60

- 秋山幹男 2003 成人における実父母との似より感—女子学生をもつ母親と父親について— 広島文教女子大学紀要 38 165-182
- 秋山幹男 2004 空からくるエネルギーとは何か 広島文教女子大学心理教育相談センター年報 11 69-80
- 秋山幹男 2004 親子の似より感と結びつき—家族イメージ法を用いた分析— 広島文教女子大学紀要 39 119-137
- 秋山幹男 2006 交流分析における自我状態について —女子学生における親子の似より感とのかかわり方— 広島文教女子大学紀要 41 83-99
- ケースメント, A. 編 氏原 寛監訳 2001 ユング13人の弟子が今考えていること ティシイ, D. 川戸 圓訳 第13章 ジェームズ・ヒルマンに見られるねじれと裏返し 305-333 ミネルヴァ書房
- 藤見幸雄 2004 痛みと身体の心理学 新潮社
- フランクル, V. E. 大沢 博訳 1979 意味への意志 ブレーン出版 (Frankl, V. E. 1969 The Will to Meaning)
- 伊藤隆二 1998 「こころの教育」とカウンセリング 大日本図書
- 伊藤隆二 2003 問主観カウンセリング 駿河台出版社
- 岩田慶治 2005 木が人になり、人が木になる 人文書館
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 (第3版) 東京大学出版会
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教心研 31 292-302
- 加島祥造 2000 タオ—老子— 筑摩書房
- 加島祥造 2005 肚 —老子と私— 日本教文社
- 加島祥造 2007 老子までの道 朝日新聞社
- 諸富祥彦 1999 トランスパーソナル心理学入門 講談社
- 諸富祥彦 1997 フランクル心理学入門 コスモス・ライブラリー
- ミンデル, A.・高岡よし子・伊藤雄二郎訳 1996 プロセス指向心理学 春秋社 (Mindell, A. 1985 River's Way)
- ミンデル, A. 藤見幸雄・青木聡訳 2001 24時間の明晰夢 春秋社 (Mindell, A. 2000 Dreaming While Awake)
- ミンデル, A. 藤見幸雄・伊藤雄二郎訳 2002 昏睡状態の人と対話する 日本放送出版協会 (Mindell, A. 1989 Coma: Key to Awakening)
- ミンデル, A. 藤見幸雄・青木聡訳 2003 プロセス指向のドリームワーク 春秋社 (Mindell, A. 2001 The Dreammaker's Apprentice)
- ミンデル, A. 2006 身体症状に〈宇宙の声〉を聴く —癒しのプロセスワーク— 日本教文社 (Mindell, A. 2004 The Quantum Mind and Healing)
- 西平直喜 1970 新しい存在と価値の発見 都留 宏編 青年心理学 有斐閣 133-180
- 岡野守也 2000 トランスパーソナル心理学 青土社
- 杉田峰康 1976 人生ドラマの自己分析—交流分析の実際— 創元社
- 杉田峰康 1985 講座サイコセラピー 第8巻 交流分析 日本文化科学社
- 谷川俊太郎 2005 シャガールと木の葉 集英社
- 内山興正 1990 御いのち抄 柏樹社
- 内山興正 2004 自己—ある禅僧の心の遍歴— 大法輪閣 (自己—宗派でない宗教— 1965 柏樹社の復刻)
- ヴァン・デン・ベルク, 早坂泰次郎 1982 現象学への招待 —(見ること)をめぐる断章 川島書店
- 和田重正 1984 もう一つの人生観 地湧社
- ヴィーダマン, F. 1986/高野雅司訳 魂のプロセス—自己実現と自己超越を結ぶもの— コスモス・ライブラリー (Wiedemann, F. 1986 Between Two Worlds)
- ウイルバー, K. 吉福伸逸訳 1986 無境界—自己成長のセラピー論— 平河出版社
- ウイルバー, K. 大野純一訳 1996 万物の歴史 春秋社 (Wilber, Ken 1996 A brief history of everything)
- ウイルバー, K. 吉福伸逸・ブラブッダ・菅靖彦訳 1997 アートマンプロジェクト—精神発達のトランスパーソナル理論— 春秋社 (Wilber, K. 1980 The Atman Project The Theosophical Publishing House)
- 横山紘一 1987 十牛図の世界 講談社
- 横山紘一 2002 やさしい唯識 日本放送出版協会

娘は両親のどこと似よるのか

資 料

- F1. 内向性（12項目）：しょげやすい 臆病な 感傷的な（オセンチな） 意志の弱い 甘えた ロマンチックな 行動力のある（－） 他人を気にする 指導力のある（－） スケールの大きな（－） 内気な 服従的な
- F2. 自己顕示性（9項目）：利己的・自己中心的な 支配欲の強い 強がり うぬぼれの強い わがままな ひねくれた 頑固な 虚栄心の強い 粗暴な
- F3. 誠実性（14項目）：礼儀正しい ねばり強い 几帳面な ひたむきな ものを深く考える 包容力のある 正義感の強い 献身的な 親切な やさしい なげやりなところのある
- F4. 明朗性（7項目）：明るい ユーモアのある 友人の多い さっぱりした 冒険好きな 未来に大きな希望をもつ 孤独な（－）
- その他（6項目）：しつと深い 不安定な 神経質な（線の細い） 疑い深い（不信の） （毎日の生活に）生きがいを感じる 素直な

—平成19年10月26日 受理—